

「食用作物・稲作栽培」

宮澤

MIYAZAWA
Jyoji

譲治

PROFILE

高校卒業後、社会人生活を経て高知大学農学部に入學。研究室では作物栽培を、大学院ではイネを専攻し、大学院とJICAの連携プログラムを利用して青年海外協力隊へ。2014年10月から、当時ベナンに本部機能を移していたアフリカライスセンターや、同国の農村地域で活動中。

研究と協力の両立制度を生かし
世界の主食「コメ」を育てる

旅が大好きな宮澤さん。高校卒業後、社会人生活でお金を貯めて世界各地を旅していた。長年、体調不良に悩んでいたが、25歳のときにインド在住の友人の紹介で現地の伝統医療による治療を受け、体調が回復したことがきっかけで、自分も人に役立つ仕事がしたいと考え始めた。

自分にできることを探す中で出会ったのが、高知

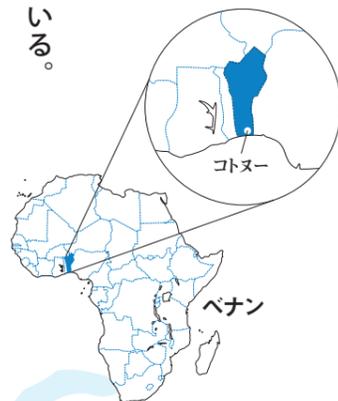
JICA
Volunteer
Story



アフリカライスセンターの同僚たちと、センターのデモ圃場前で

「アフリカのコメ生産を後押ししたい」

近年、アフリカで消費が増えるコメ。栽培面積の拡大によってコメの生産量は徐々に増えているが、需要にはまだまだ追いついておらず、面積当たりの収量の増加が不可欠となっている。宮澤譲治さんは、ベナンで自らもイネを育てながら、アフリカに適した稲作の技術開発のために尽力している。



大学農学部の国際支援学コースだ。農林水産分野の研究や技術協力を通して国際社会に貢献する人材を育てるもので、海外での短期研修や調査を行い、これまでにも青年海外協力隊員を輩出してきた。実家で農作業をしたこともあった宮澤さんにとって、農業は親しみのあるテーマだった。一念発起して受験勉強を始め、28歳で無事、合格。遅咲きの学生生活が始まった。

入学前から青年海外協力隊に興味があった宮澤さん。授業の一環として、タイで農業研修を受けたとき、宮澤さんが特に楽しいと感じたのがイネの試験だった。帰国後は作物栽培の研究室に入り、イネと水に関する研究に没頭した。大学院で勉強を続けるか、協力隊に参加するかを悩んだときに、大学と国際研究機関の連携を推進する農学知的支援ネットワークのプログラムで、大学院での研究と協力隊活動を両立できる仕組みがあると知った。「協力隊員として国際研究機関で活動できれば、職歴にもなりませんし、その成果を修士論文に反映させることもできます。自分のやりたいことがどちらまかなえられると感じて、即座に参加を希望しました」

宮澤さんが派遣されたのは、ギニア湾に面した西アフリカの小国・ベナンに一時的に本部機能が置かれていたアフリカライスセンター（2015年にコートジボワールに移転）だ。ここではアフリカ稲作復興のための共同体（CARD）など、稲作に関するJICA事業や、サハラ以南アフリカの稲作栽培マニュアルの整理と分析、稲作農家の収量要因分析などのほか、実験計画の作成や予備試験も行っている。

宮澤さんの活動拠点はもう一つある。ベナン中部のパパゾメという小さな農村だ。電気も水道も無いこの場所で、宮澤さんはイネの栽培実験を手掛けている。当初は、地元の人に栽培実験の意味が上手く伝わらず、人や牛がいつの間にか農場に入ってきて



a.イネの生育調査は毎週行っている。収量の向上が今の課題だ
b.綿畑で。農家と共に除草作業を行うことも
c.地元農家に直接アンケート調査を行い、課題を探る
d.人間の手か動物の力を借りて田畑を耕す

人口増加に対応するコメの増産
鍵となるのは単位収量の改善

アフリカでは、人口の増加や食文化の変化などにより、コメの消費量が年々増加している。しかし、雨水に頼った栽培がほとんどで、稲作に向かない地域も多い。栽培面積が増えたおかげでコメの生産量は増えているが、面積当たりの収量が増えなければ需要の増加に追いつくことができない。実際に、2007年から翌年にかけてのコメ価格の高騰は食糧危機を招き、暴動が起こった地域もあった。アジアを中心とした他地域からの輸入に頼らない、自給率の改善は不可欠だ。

宮澤さんは、研究をしていないときは地元の農家と一緒に農作業に励むなど、交流を通してアフリカの農家に必要なものを学び、論文にまとめようと奔走中だ。昨年の経験を踏まえて、より現地の農業スタイルに合わせた実験に取り組んでいる宮澤さんの研究に、地元の農家も興味を持ち始めている。

「この場所に来て一番驚いたのは、膨大な家事や育児を全てこなした上で、私よりも力強く農作業をこなしてしまう女性たちのパワーです」と話す宮澤さん。アフリカの農村でたくましく生きる人々に刺激を受け、いつかは自分でもおいしい農産物を人々に届けたいと思い始めた。だが今は、少しでもアフリカの人たちの役に立とうと目の前の研究を続けている。